

# プッチーニ作曲 歌劇「修道女アンジェリカ」

200315

幕	場	場面	内容	分	主な登場人物			見どころ
一幕 58分	1	礼拝	修道女たちの礼拝が聞こえ終わると、院長が礼拝に遅れた者や、いたずらをした者を叱り、やがて休憩の時間になる。アンジェリカは罪を悔いているとして許され、ルチツラは合唱の合間にふざけた罰として糸紡ぎをさせられ、オスミーナは礼拝中に真紅のバラを隠し持っていたというので叱責され部屋へ下がらされる。	8	アンジェリカ	修女長		
	2	修道院の日常生活	修道長は、みんなに休憩を言い渡すと、修道女ジェノヴィエツァが、太陽が黄金色に照り輝き中庭を光らせているのを見て神に感謝する。だが1年前にも同じようなことがあったとき、同僚の修道女が亡くなったのを思い出し、彼女たちはその修道女の墓へ行って水を注ぐ。 アンジェリカは願いごととしては花は、生に開くことであり、死の世界には開かない、という。 修道女たちも口々に、望みは小羊を見ることだと天に語るが、アンジェリカは望みはないと答えるが、アンジェリカが元貴族で、7年来音信不通の家族について知りたいと願っているはず、とヒソヒソ話する。 アンジェリカは、修道女のキアラが蜂に刺されたこと聞き、薬草を摘み、調合し看護係に教える。	20 12	アンジェリカ	修女長	ジェノヴィエツァ	
	3	面会	托鉢修女たちが来て、ロバから1日の恵みを下ろして皆に見せる。彼女たちが門の外に立派な馬車が止まっていたと話すので、アンジェリカは興奮してその馬車について訊ねる。 やがて鐘が鳴り、各自が自分の面会人であってくれと願っているところへ院長が入って来て「アンジェリカ」と呼ぶ。ほかの修道女たちは、がっかりして泉の水を汲みに行く。 院長は、興奮気味のアンジェリカが静まるのを待って、面会人が伯母の公爵夫人と告げる。	7	アンジェリカ	修女長	ジェノヴィエツァ	
	4	息子の死	アンジェリカは、伯母の公爵夫人と修道院の談話室で面会する。来院目的は、アンジェリカの妹が結婚することになったので、20年前に亡くなった両親の遺産相続の署名を貰うためであった。 アンジェリカは、母の姉でありながら冷酷な人であると不満を洩らし、7年も前にアンジェリカは、未婚のまま子を産んだため、この修道院に入れられたのだった。 アンジェリカは、子供の消息を訊ねるが、はっきりしない夫人にせまると、子供は2年前に病で死んだと答えるので、アンジェリカは泣き崩れる。やがて夫人は、アンジェリカのサインを受け取って帰って行く。	20 13	侯爵夫人	アンジェリカ		
	5	聖母への祈り	アンジェリカは、息子の死を悲しみ、息子がいる世界から迎えに来てくれることを、期待する。 すると、修道女達が、聖母が神の恩寵を示したと言い、アンジェリカは、息子の世界に会いに行くことを決心する。修道女たちとともに、祈りを捧げて聖母を讃える。	8	アンジェリカ		ジェノヴィエツァ	アンジェリカの歌
	6	毒薬自殺	修道院が闇に包まれると、美しい間奏曲を背景にアンジェリカは、草を摘んで壺の中に入れ、火に当てて煮立てて、自殺の準備をする。 彼女は同僚たちに別れを告げ、神秘的ともいえる恍惚感に満たされて毒薬を呷る。 しかし、一瞬我にかえったアンジェリカは、自殺の罪を犯したことを聖母に詫び、助けたまえと祈る。 すると遠くの方から天使の歌声が聞こえ、光で一杯に満たされ、罪人であるアンジェリカを迎えるために扉がゆっくりと開き始める。 小さな礼拝堂の扉が開き、死んだ彼女の息子を連れた聖母があらわれ、死んで行く母親の方に子供を押しやる。アンジェリカは息を引き取り、天使たちの歌声が高らかに響き渡る。	18 10	アンジェリカ			

(注)紙の音がするので、開幕中は、このA4紙をしまってください。